

労働・労苦・苦難

作品の要素

- ・農耕の技術の伝授
  - ・挿話・逸話による文学的楽しみ
  - ・内乱による荒廃からの復興祈念
  - ・「人生」の提示
  - ・ヘレニズム的詩作とカッリマコスの文学論（下の「文学伝統」(3)を参照）を踏まえた詩作
- (1) パトロンが要請する英雄叙事詩の忌避(recusatio)
  - (2) 先行文学からの「参照」

時代背景

- 59 BC カエサル執政官、農地法成立、翌年よりガッリア遠征、内乱勃発まで。  
55 ポンペイウスとクラッスス執政官。三頭政治。  
53 クラッスス、東方で敗死。  
49 カエサル、ルビコン河を渡り、内乱勃発。  
48 パルサーロスの戦い、ポンペイウスは逃亡先のエジプトで殺害。  
44 カエサル暗殺。  
43 ムティナの戦い、アントーニウスに対しオクターウィアヌス軍の勝利。キケロー殺害。  
42 ピリッピの戦い。アントーニウス・オクターウィアヌス軍が共和政派軍を破る。  
41 ペルーシア戦争。土地没収（ウェルギリウスの父はこの難を危うく免れる）。  
31 アクティウムの戦い、オクタウィアヌス軍がアントーニウス・クレオパトラ連合軍に勝利。  
27 オクターウィアヌスにアウグストゥスの称号 長い内乱のあとに「ローマの平和」の樹立

詩人の詩作経歴

- プブリウス・ウェルギリウス・マロー(P. Vergilius Maro. 70-19 BC。北イタリア、マントゥア出身。)
- ・マエケーナス庇護下の文学サークルに加わる →パトロンは詩人に英雄武勲詩を求める
  - ・『牧歌』全10歌(39-38頃)：「田園」「閑暇」を歌う
  - ・『農耕詩』全4歌(29頃)：教訓叙事詩
  - ・『アエネーイス』全12歌(遺作)：「ローマ建国」を主題とする英雄叙事詩
  - ・一貫して、韻律はヘクサメトロス、主要モチーフに「国土」

文学伝統

- (1) 散文による農事指導書：大カトー『農業論』、ウァッロー『農事考』
- (2) 教訓叙事詩：ヘーシオドス『仕事と日』、ルクレティウス『事物の本性について』
- (3) カッリマコスの文学論：長大なだけで平凡な英雄叙事詩ではなく、彫琢を極め、洗練された小品を推奨。教訓叙事詩はこれに合致（下位区分には、讃歌、縁起詩など）、他に、小叙事詩。

序歌(1.1-5)

Quid faciat laetas segetes, quo sidere terram

uertere, Maecenas, ulmisque adiungere uitis  
conueniat, quae cura boum, qui cultus habendo  
sit pecori, apibus quanta experientia parcis,  
hinc canere incipiam.

何が穀物を豊かに実らせ、いかなる星のもとで、大地を耕し、葡萄を楡の木に結びつけるべきか。マエケ  
ーナスよ、牛にはどんな配慮が、家畜を飼うにはどのような世話が、つつましい蜜蜂を養うには、どれ  
ほどの熟練が必要なのか。私はこれから歌おうと思う。

中心的モチーフ：ラボル(labor)「労働」「労苦」「苦難」

5つの要素との関連

### 1. 技術伝授

Est etiam ille labor curandis uitibus alter,  
cui numquam exhausti satis est: namque omne quotannis  
terque quaterque solum scindendum glaebaque uersis  
aeternum frangenda bidentibus, omne leuandum  
fronde nemus. redit agricolis labor actus in orbem,  
atque in se sua per uestigia uoluitur annus.(2.397-402)

葡萄の手入れには、まだ他の仕事があり、それにはいくら労力を費やしても、けっして充分とは言えない。  
つまり毎年三度も四度も、すべての土を犁で耕し、土塊をたえず二又鍬の背で打ち砕き、すべての木々は、  
葉を減らしてやらねばならないのだ。農夫の労働は輪をなしてもどり、一年は、みずからの足跡をめくり  
ながらもとに帰る。

### 2. 黄金時代・鉄の時代の神話が示す労働の起源(1.118-46)

Nec tamen, haec cum sint hominumque boumque labores  
uersando terram experti, nihil improbus anser  
Strymoniaeque grues et amaris intiba fibris  
officiunt aut umbra nocet. pater ipse colendi  
haud facilem esse uiam uoluit, primusque per artem  
mouit agros, curis acuens mortalia corda  
nec torpere graui passus sua regna ueterno.  
ante Iouem nulli subigebant arua coloni:  
ne signare quidem aut partiri limite campum  
fas erat; in medium quaerebant, ipsaque tellus  
omnia liberius nullo poscente ferebat.  
ille malum uirus serpentibus addidit atris  
praedarique lupos iussit pontumque moueri,  
mellaque decussit foliis ignemque remouit  
et passim riuis currentia uina repressit,

ut uarias usus meditando extunderet artis  
paulatim, et sulcis frumenti quaereret herbam,  
ut silicis uenis abstrusum excuderet ignem.(118-135)

しかし、人間と牛が苦勞して、こうしたことを経験しつつ懸命に大地を耕しても、なおも邪まな鷲鳥や、ストリューモン川の鶴や、苦い繊維のキクヂシャが妨げとなり、日陰もまた害となる。父なる神自身が、耕作の道は険しいことを望まれたのだ。この神が最初に、技術を用いて大地を耕作させ、人間の心を気苦勞で研ぎ澄まし、みずからの王同が、重い無氣力でまどろまぬようはかられた。

ユッピテル以前には、農夫は誰も畑を耕さなかった。田園に標石を置き、境界で区切ることさえ不敬であった。人々は共同の収穫を求め、人地はおのずと、今よりもっと氣前よく、誰が求めなくてもすべてを生んだ。

だが神は、黒い蛇に悪しき毒液を与え、狼に掠奪を命じ、海を波立たせ、木の葉から蜜を振り落とし、火を遠ざけて、あちこちを流れる葡萄酒の小川を押し止めた。そのため人々は、経験と修練によって、しだいに多様な技術を牛み出した。彼らは畝溝を掘って穀物の発芽を促し、火打ち石の石目から、隠された火を打ち出した。

### 3. 内乱による荒廢とそこからの復興（「農民讃歌」

ollicitant alii remis freta caeca, ruuntque  
in ferrum, penetrant aulas et limina regum;  
hic petit excidiis urbem miserosque penatis,  
ut gemma bibat et Sarrano dormiat ostro;  
condit opes alius defossoque incubat auro;  
hic stupet attonitus rostris, hunc plausus hiantem  
per cuneos geminatus enim plebisque patrumque 510  
corripuit; **gaudent perfusi sanguine fratrum,**  
**exsilioque domos et dulcia limina mutant**  
**atque alio patriam quaerunt sub sole iacentem.**  
agricola incuruo terram dimouit aratro:  
hic anni labor. hinc patriam paruosque nepotes  
sustinet. hinc armenta boum meritosque iuuenos.  
nec requies, quin aut pomis exuberet annus  
aut fetu pecorum aut Cerealis mergite culmi,  
prouentuque oneret sulcos atque horrea uincat. (2.503-518)

ある人々は、危険の潜む海を櫂でかき乱し、まっしぐらに劍の戦いへと走り、宮殿や王の住居に入り込む。またある人は、宝石の杯で飲み、テュロスの紫の床に眠るために、都を襲撃して破壊し、家々に悲惨な境遇をもたらす。ある人は財産を隠し、埋めた黄金の上につつ伏したまま離れず、ある人は演壇に眩惑されて呆然とし、ある人は、ぼかんと口を開けて、劇場の全座席から何度も鳴り響く平民と貴族の拍手喝采にうっとりとする。また、**兄弟の血を浴びて喜ぶ者もあれば、愛しい家庭と家を、亡命の地と交換し、異郷の太陽の下に広がる祖国を求めていく者もいる。**

しかし農夫は、曲がった鋤で大地を耕す。これこそ一年の労働であり、これで祖国と小さな孫らを養い、これで牛の群れと、働きものの雄牛たちを飼育する。一年が、果実や、家畜の子らや、穀物の茎の束に満

ち溢れ、収穫の重みが畝にのしかかり、倉をつぶさんばかりになるまでは、休むことさえありえない。

#### 4. 人生

optima quaeque dies miseris mortalibus aevi

prima fugit; subeunt morbi tristisque senectus

et labor, et durae rapit inclementia mortis. (3.66-68)

哀れな死すべきものにとって、生涯の最も良い日々は、つねに真っ先に逃げていく。あとには病氣と惨めな老年と苦しみがやってきて、冷厳な死が無慈悲に命を奪い取る。

#### 5. ヘレニズム的詩作

in tenui labor; at tenuis non gloria, si quem

numina laeua sinunt auditque uocatus Apollo. (4.6-7)

小さなものに労を注ぐが、しかし栄光は小さくない、もしも敵意ある神々が妨げず、アポロが祈りを聴いてくれるなら。

ラボル(labor)の功罪

tum uariae uenere artes. labor omnia uicit

improbis et duris urgens in rebus egestas. (1.145-146)

そのとき、さまざまな技術が生まれた。悪しき労苦と、つらい生活の中で差し迫る欠乏が、すべてを征服したのである。

(語順どおりに訳すと)

そのとき(鉄の時代に)さまざまな技術が生まれた。労苦がすべてを征服した。

だが、それは邪まなもの。厳しい暮らしの中で追い立てる窮乏。

improbis → 「邪ま」？ 「厄介」？

黄金時代の矛盾(「農民讃歌」(2.458-540)の結び)

ante etiam sceptrum Dictaei regis et ante

impia quam caesis gens est epulata iuuenis,

aureus hanc uitam in terris Saturnus agebat;

necdum etiam audierant inflari classica, necdum

impositos duris crepitare incudibus ensis. (2.536-540)

ディクテーの王(ユピテル)が王権を握り、不敬な人種が牛を殺して宴を催す以前にも、黄金のサートウルヌスが、こうした生活を地上で送っていた。人はまだ、戦闘喇叭が鳴り響くのも、硬い鉄床の上で、剣が打ち鍛えられる音も聞いたことはなかった。

人間＝「固い種族」：その誕生＝労働をそれに合わせて律すべき自然の法則の起源

continuo has leges aeternaque foedera certis

imposuit natura locis, quo tempore primum

Deucalion uacuum lapides iactauit in orbem,  
unde homines nati, durum genus. (1.60-63)

これらの法と永遠の掟（＝気候風土に従って定まった産物）は、自然がおのおのの土地に定めており、それは、デウカリオンが無人の大地に石を投げ、そこから人間という、頑強な（固い）種族が誕生したまさにそのときからなのだ。

言及される神話：

Cataclysmus, quod nos diluuium uel irrigationem dicimus, cum factum est, omne genus humanum interiit praeter Deucalionem et Pyrrham, qui in montem Aetnam, qui altissimus in Sicilia esse dicitur, fugerunt. hi propter solitudinem cum uiuere non possent, petierunt ab Ioue ut aut homines daret aut eos pari calamitate afficeret. tum Iouis iussit eos lapides post se iactare; quos Deucalion iactauit, uiros esse iussit, quos Pyrrha, mulieres. ob eam rem laos dictus, laas enim Graece lapis dicitur.

われわれの言葉で氾濫とか冠水と呼ぶ大洪水が起きたとき、人類はデウカリオンとピュッラを除いてすべて死に絶えた。この二人はアエトナ山ヘーシキリアで一番高いと言われているので一逃れた。が、二人だけでは生きてゆけないので、ユピテル神に、人間を授けてくれるか、さもなければ、自分たちにも同じ災厄をもたらすよう求めた。そのときユピテルは彼らに、石を背後に投げよ、と命じた。すなわち、デウカリオンが投げた石が男に、ピュッラの投げた石が女になるようにという下命であった。このために民はラオスと呼ばれた。ギリシア語で石はラアスと言うからである。（ヒュギーヌス『神話伝説集』153）

「固い種族」＜起源＝「石」(λᾶας) → 「民」(λαός)

ピュッラとデウカリオンが、パルナッソスから降りてきた後、初めて家を据え、臥所の交わりなしに単一の石の一族を創ったのだ。それで彼らは民(λαοί)と称された。

（ピンダロス『オリュンピア祝勝歌』第九歌 43-46 行。内田次信訳）

人間は石から生まれたので、民(λαοί)と呼ばれる。（古注ピンダロス『オリュンピア祝勝歌』第九歌 45 行）

デウカリオンとピュッラが石を後ろに投げて人間を創ったことをアクシラオスが証言している。

（古注ピンダロス『オリュンピア祝勝歌』第九歌 70a 行=Acusil. *FGrHist.* 35）

われらデウカリオンから生まれたかぎりの民(λαοί)（カッリマコス断片 496 Pf.）

「固い」＝「頑健」「変化に動じない」「強い耐久性」

ルクレーティウス『事物の本性について』第5巻 925-31 行

Et genus humanum multo fuit illud in arvis

durius, ut decuit, tellus quod dura creasset,

et maioribus et solidis magis ossibus intus

fundatum, validis aptum per viscera nervis,

nec facile ex aestu nec frigore quod caperetur

nec novitate cibi nec labi corporis ulla.

人間もその頃の種族は地上にあってもっとずっと固かった。それももっとも、固い大地から生まれたため、

ずっと大きく、ずっと堅固な骨が内であって支え、臓器を強力な筋肉が包んでいるので、暑さにも寒さにも、食べつけない食物にも体の変調にも動じない種族であった。

「固い」＝「労苦に耐える」（「春の讃歌」(2.319-345)の結び)

non alios prima crescentis origine mundi  
inluxisse dies aliumue habuisse tenorem  
crediderim: uer illud erat, uer magnus agebat  
orbis et hibernis parcebant flatibus Euri,  
cum primae lucem pecudes hausere, uirumque 340  
terrea progenies duris caput extulit aruis,  
immissaeque ferae siluis et sidera caelo.  
nec res hunc tenerae possent perferre laborem,  
si non tanta quies iret frigusque caloremque  
inter, et exciperet caeli indulgentia terras. (2..336-345)

私は思うに、天地創成の最初のころも、このように毎日は輝いて、こうした気候がいつも続いていたのだろう。そのときは春であり、広大な世界は春を行き、東風は冬の息を控えていた。そのとき、最初の獣が光を吸い込み、土から生まれた人間の種族が、固い野原に頭をもたげ、野獣は森に、星は天に放たれた。もしこの大いなる安らぎの季節が、寒さと暑さの間にめぐり来ず、天の慈愛が、大地を迎え入れないなら、まだひ弱な生き物は、この地上の労苦に耐えられはしまい。

「固い」＝「戦い、苦難に耐える」（「イタリア讃歌」(2.136-176)の結び)

haec genus acre uirum, Marsos pubemque Sabellam  
adsuetumque malo Ligurem Volcosque uerutos  
extulit, haec Decios Marios magnosque Camillos,  
Scipiadas duos bello et te, maxime Caesar, 170  
qui nunc extremis Asiae iam uictor in oris  
imbellem auertis Romanis arcibus Indum.  
salue, magna parens frugum, Saturnia tellus,  
magna uirum: tibi res antiquae laudis et artem  
ingredior sanctos ausus recludere fontis,  
Ascraeumque cano Romana per oppida carmen.(2.167-176)

この土地は、強壯な（鋭い、意気盛んな）男たち（の種族）も生み出した。マルシ人に、サベリ人の若者ら、辛苦に慣れたリグリア人や、投げ槍にたけたウォルスキ人を。この地は、デキウス氏やマリウス氏、偉大なカミルス家、戦いで仮借ない（固い）スキピオ一族と、最も偉大なカエサルよ、あなたも生んだ。あなたは今、アジアの最果ての土地ですでに勝利を収め、戦いに向かないインド人を、ローマの砦から遠ざけている。

健やかであれ、作物の大いなる親、サトゥルヌスの大地よ、男たちの偉大な母よ。あなたのために、私は古えからの誉れと技の仕事に取り組み、あえて聖なる泉を拓こうとする。私はローマの町々で、アスクラ人の歌をうたおう。

叙事詩の忌避(recusatio)

interea Dryadum siluas saltusque sequamur  
intactos, tua, Maecenas, haud mollia iussa:  
te sine nil altum mens incohat.(3.40-42)

だがそれまでは、マエケナスよ、あなたの容易ならざる命令に従って、ドリュアス(森のニンフ)たちの森と、未踏の林間の牧場を追い求めよう。

→ジレンマ:「戦争」を歌わない - 国土荒廃の原因を語らない - 真の復興祈念となりうるか?

←英雄叙事詩『アエネーイス』執筆

「固い」「柔らかい」のさまざまな含意

1. 「固い」=鍛練に耐える ⇔ 「柔らかい」=手加減・保護が必要

### 1.1 農夫の頑強な肉体

pecorisque magistris  
uelocis iaculi certamina ponit in ulmo,  
corporeque agresti nudant praedura palaestra.(2.529-531)

(農夫は)楡を的に定めて、家畜の番人たちのために投げ槍の試合を催したり、鍛え抜かれた(非常に固い)体を裸にしての相撲が始まることもある。

#### 1.1a 葡萄酒のしっかりした味 (cf. 4.1)

sunt et Aminneae uites, firmissima uina,  
Tmolius adsurgit quibus et rex ipse Phanaeus, (2.97-98)

アミンネア種という、もっともこくのある(堅固な)酒になる葡萄もある。これにはトモルス酒の酒も、王者たるパナエの酒さえも、敬意を表して立ち上がる。

### 1.2 雌牛をめぐる戦いに敗れた雄牛の臥薪嘗胆

ergo omni cura uiris exercet et inter  
dura iacet pernox instrato saxa cubili  
frondibus hirsutis et carice pastus acuta, (3.229-231)

こうして負け牛は、力を鍛えることに専心する。夜はずっと固い岩の間で、藁も敷かないねぐらに伏し、トゲだらけの葉や尖った菅を食物とする。

Cf. also 3.257, 259(サベッリーの豚の鍛練: レアンドロスに嵐の海を渡らせようとした恋)

### 1.3 若枝へのいたわり (cf. 3.1below)

Ac dum prima nouis adolescit frondibus aetas,  
parcendum teneris, et dum se laetus ad auras  
palmes agit laxis per purum immissus habenis,

ipsa acie nondum falcis temptanda,

木が幼少で、新しい葉を茂らせて成長している間は、その幼弱な体をいたわらねばならない。また若枝が、手綱をゆるめられ、澄んだ大気の中へ放たれて、聞きとして空へ伸びているうちは、まだ枝そのものを、鎌の刃で攻めてはならない。

## 2. 「固い」＝自然への統御

### 2.1 葡萄の枝の剪定

inde ubi iam ualidis amplexae stirpibus ulmos

exierint, tum stringe comas, tum brachia tonde

(ante reformidant ferrum), tum denique du

exerce imperia et ramos compesce fluentis. (2.367-370)

だがその後成長して、今やしっかりした幹を楡の木の支え木に巻きつけたら、そのときこそ茂った葉を刈り、枝を切り取れ—それまでは葡萄は刃を怖がっている。今こそついに厳しい（固い）権力を行使して、しまりなく広がる枝を抑制せよ。

### 2.2 馬の調教

crescere iam domitis sinito; namque ante domandum

ingentis tollent animos, prensique negabunt

uerbera lenta pati et duris parere lupatis. (3.206-208)

調教が終わったら、体を大きく太らせるがよい。調教の前にそうすると、馬はあまりに意気盛んになり、捕らえられても、しなやかな鞭を受け、硬い歯のついた馬衝に従うのを拒むだろう。

Cf. 4.399：自然の力を象徴する神格プロテーウスを押さえ込む力；農具(1.160, 1.261, 2.355, 3.515)

## 3. 「固い」＝自然(を統御すること)の厳しさ

### 3.1 野生の獣による葡萄の若葉の被害

Texendae saepes etiam et pecus omne tenendum,

praecipue dum frons tenera imprudensque laborum;

．．．

frigora nec tantum cana concreta pruina

aut grauis incumbens scopulis arentibus aestas,

quantum illi nocuere greges durique uenenum

dentis et admorsu signata in stirpe cicatrix. (2.371-372, 376-79)

垣根も編んでこしらえて、すべての家畜を遠ざけるべきだ。とくに葉が弱々しく（柔らかく）、まだ労苦を知らない間には．．．白い霜の凍てつく寒さも、焼けつく岩の高台に重くのしかかる夏の暑さも、家畜の群れや有毒な硬い歯と、噛まれて幹に印された傷痕ほどには、葉に重大な害をおよぼしたことはない。

### 3.2 自然に伸びる枝葉と下草への対処：剪定、刈り取り



bis uitibus ingruit umbra,

bis segetem densis obducunt sentibus herbae;

durus uterque labor: (2.410-412)

葉陰は二度、葡萄の木にのしかかり、草は二度、藪を密生させて葡萄畑を覆ってしまう。どちらの仕事もつらいものだ。

4. 「固い」=未熟さ、粗暴さ ⇔ 「柔らか」=熟成

4.1 葡萄酒の「固さ」←ハチミツがまるやかに

haec potior suboles, hinc caeli tempore certo

dulcia mella premes, nec tantum dulcia quantum

et liquida et durum Bacchi domitura saporem.(4.100-102)

これが(蜜蜂)の優良な品種であり、この品種から、天のめぐりの一定の時期に甘い蜜を搾れるだろう。しかも甘さにもまして透明な蜜は、葡萄酒の辛い(固い)味を和らげるのに適している。

4.2 命を粗末に扱う行為(比喩:夜鳴き鶯=オルペウス、雛=エウリュディケ、農夫=冥界の掟)

qualis populea maerens philomela sub umbra

amissos queritur fetus, quos durus arator

obseruans nido implumis detraxit; at illa

flet noctem, ramoque sedens miserabile carmen

integrat, et maestis late loca questibus implet. (4.511-515)

それはまるで夜鳴き鶯が、ポプラの葉陰で悲しみに暮れ、失った雛たちを嘆いているかのようにだった。雛はまだ羽も生えないのに、粗暴な(固い)農夫が見つめて巣から奪い去ったのだ。それで母親は夜通し鳴き悲しみ、枝に止まって哀れ誘う歌を繰り返し、あたり一帯を悲痛な嘆きで満たしている。

4.3 春:葡萄酒が「柔らかく」熟成 (cf. 1.1a)

extremae sub casum hiemis, iam uere sereno.

tum pingues agni et tum mollissima uina,

tum somni dulces densaeque in montibus umbrae. (1.340-342)

冬の最後の日が過ぎて、すでにうらかな春になったとき、そのとき小羊は太り、そのとき葡萄酒は最も芳醇。そのとき眠りは心地よく、山の上の木陰も濃い。

4.4 栽培・手入れが果実を熟成

Quare agite o proprios generatim discite cultus,

agricolae, fructusque feros mollite colendo,

neu segnes iaceant terrae. (2.35-37)

それゆえ、さあ農夫たちよ、それぞれの種類に適した栽培法を学びなさい。野生の果実を栽培によってまろやか(柔らか)にし、大地を無為のままに寝かせておかぬよう。

5. 「固い」=死(不可避の災い)の仮借なさ ⇔ 「柔らか」=若さ、生命力

5.1 (家畜の)病氣, 老年, 労苦, 死: 生き物=死すべき存在

optima quaeque dies miseris mortalibus aevi

prima fugit; subeunt morbi tristisque senectus

et labor, et durae rapit inclementia mortis. (3.66-68)

衰れな死すべきものにとって、生涯の最も良い日々は、つねに真っ先に逃げていく。あとには病氣と惨めな老年と苦しみがやってきて、冷厳な死が無慈悲に(固い死の無慈悲が)命を奪い取る。

5.2 疫病の最初の徴候

demissae aures, incertus ibidem

sudor et ille quidem moriturus frigidus; aret

pellis et ad tactum tractanti dura resistit.

haec ante exitium primis dant signa diebus: (3.500-503)

(馬は) その耳は垂れ下がり、そこに汗が断続的に流れるが、しかし汗は、死が近づくと冷たくなる。皮膚は乾燥して硬くなり、手で触っても弾力がない。最初の時期には、死ぬ前の徴候はこのようなものだった。

5.3 春: 「柔らかな」湿り気=命の源

vere tument terrae et genitalia semina poscunt

...

parturit almus ager Zephyrique tepentibus auris

laxant arua sinus; superat tener omnibus umor. (2.324, 330-331)

春には大地は膨らみ、命の種を求める。・・・恵みの大地は作物を海、暖かい西風の息吹に野は胸を開き、穏やか(柔らか)な湿り気がすべてに満ち渡る。

『アエネーイス』での「固い種族」: イタリア原住の種族

1. 原始的種族: 「教化」を必要とする

tum rex Euandrus Romanae conditor arcis:

'haec nemora indigenae Fauni Nymphaeque tenebant

gensque uirum truncis et duro robore nata,

quis neque mos neque cultus erat, nec iungere tauros

aut componere opes norant aut parcere parto,

sed rami atque asper uictu uenatus alebat.

primus ab aethereo uenit Saturnus Olympo

arma Iouis fugiens et regnis exsul adeptis. 320

is genus indocile ac dispersum montibus altis

composuit legesque dedit, Latiumque uocari

maluit, his quoniam latuisset tutus in oris.

aurea quae perhibent illo sub rege fuere  
saecula: sic placida populos in pace regebat,  
deterior donec paulatim ac decolor aetas  
et belli rabies et amor successit habendi.' (Aen. 8.313-327)

このとき、ローマの城塞の創建者であるエウアンドロスは言った。「この森は昔より住みなすファウヌスらとニンフらのものであった。それに、木の幹や固い樫の木から生まれた人間の種族がいたが、この種族には、しきたりもたしなみもなかった。牛を軛に繋ぐことも財を蓄えることも、実入りを儉約することも知らず、木の実と狩りを糧とする厳しい暮らしを送っていた。そこへまず、天高きオリュンプスよりサトゥルヌスがやって来た。ユピテルの武器を逃れ、王国を逐われた逃亡の身であった。この神が、蒙昧にして、山深くに散らばった種族をまとめ上げると、法律を授けて、ラティウムと名づけることを望んだ。この国に身を隠して無事であったからだ。この神を王に戴くあいだ、人々が「黄金」と呼ぶ世紀が続いた。それほど穏やかに平和な統治であった。だが、ついには少しずつ時代は傾き、色褪せて、戦争の狂乱と所有欲が入り込んだ。」

## 2. トロイア勢と敵対するイタリアの戦士が戦闘開始を前に代々継承の武勇を誇る

"durum a stirpe genus natos ad flumina primum  
deferimus saeuoque gelu duramus et undis;  
uenatu inuigilant pueri siluasque fatigant,  
flectere ludus equos et spicula tendere cornu.  
at patiens operum paruoque adsueta iuuentus  
aut rastris terram domat aut quatit oppida bello.  
omne aeuum ferro teritur, uersaque iuuentum  
terga fatigamus hasta, nec tarda senectus  
debilitat uiris animi mutatque uigorem:" (Aen. 9.603-611)

「われらは根っから頑健な(固い)種族だ。息子が生まれると、まず川へ連れてゆき、厳しく、凍るような川波で鍛える(固くする)。子供のときは夜も眠らず狩りを行い、飽くことなく森をさまよう。馬を御すこと、弓に矢をつがえることが遊びだ。青年になると、苦労を辛抱し、蓄えの少なさに慣れつつ、鋏で大地を支配するか、戦争で町々を震撼させるかする。生涯のすべてが鉄の武器とともに費やされる。牛たちの背中を突くのも逆さにした槍なら、動きの鈍い老年になっても魂の力が殺されることはなく、元気のよさも変わらない。」

参考：カエサル『ガリア戦記』7.77.4-5（包囲されたアレシアのガリア人の会議。すでに食料が尽きたときに、指導者の一人クリトグナートゥスの演説。このあと「人肉を食べても籠城」の提案をする）

'cum his mihi res sit, qui eruptionem probant. quorum in consilio omnium vestrum pristinae residere virtutis memoria videtur, animi est ista mollitia, non virtus, paulisper inopiam ferre non posse.

私が議論の相手にするのは出撃に賛成する人々だけだ。この人々の作戦には、諸君も全員一致でこれまでの武勇の記憶が宿っているのを見るであろう。だが、わずかのあいだ窮乏に耐えられないのは魂の柔弱さであって武勇ではない。